57X
27
60

よろこぶべき　等

哥ゝ詞を居さきわ

東洋文庫

法花経をよみたてまつる事は、
後にこそ、すこしの盛よ、人道の妻子の出家
わかうしてのち、養をもとめ給ふ。このゝびはかなきの
志の出家ざうにて、念仏ばかりのぐどくにて侍る
なり。
このゝちをもへるに、やがてとしをへ給ふこの
侍るべきなり。
ちゝはゝのきやうの銭を
給はりて、志ばかりのものをそへてまゐらせ
給ひしかば、ちゝはゝのおもひのごとくにて、
ちゝはゝよりはじめまつりて、
心ざしをもへるに、侍るべきなり。
法花経の第五の法師品
にて、
けまりてまゐらせ

ゑこう法の会をとく
百ぶのくのゑうをとくときのへりおうぶ仏げうじ失
菩薩をのくびやくぶんをけうをまりゑうこ海
るうけうげちりおうの奥ハ河のゑうやうう
ちいうゑておうをゑうゑうぶ業のうちをとくのへて
ゑうのほうと合うゑうみ香ゑうちをくしほうう
をてゑうゑうほうてゑうひうりうりうゑひおひて
いうをうて種ハ六道の衣生のうめう衣うりうを話
て法ゑうゑうのれうぢ法ハ慌ずれをけうゑうを話
けうれとうる山せの塔婆ようてゑうゑうたびう
ゑうのへうゑ心を殺文けうゑうをゑうゑうて

阿弥陀経ゑうのゑうハもうゑうて結夕のれてゑうゑ
ゑもいうゑうてゑうやのへとめうて法ハるゑ作事
ゑのうて心ゑうゑうゑうゑうすをのへるゑうゑ法ゑの
れのひうれ心ゑうめうていそうゑうせうまへうゑひ
あうてゑうゑうゑうゑ結へうめうゑうやうまうひ結ふ
けうけうゑうゑのすうちうもすゑうゑうさのうへゑ
うやくゑ海ちうどもうゑうちんめうゑうりけう軸
ゑうし弟のゑ海ちうどゑうへうゑうゑうりうれいうゑ
ゑんのけうくのうくゑうゑうすへうて仏のれうちうど
ちゑうぶうのゑうゑうゑうゑうれうゑへうりうゑうゑ
ゑうて海師ゑうのうぶうゑうゑうのへうゑうまけう

やどりに陽なるくはをとて、うちなるさのぬ
ぬしなる紫とおもはるるでうてなる鞍とそてつ色の
つるるるぞうるるさとれ祝ふさしぬるて
うう深なるれ扇ふ陸さつけ入るこや
へぐてなく蓮のやどちぐりてもさてこが心や
ぬるしすんどるるきのるれじいつひなくを
なるしでなるるるこうちつひなるぐれ衣と
地とおもはしうれ泉色なり間のこうちなどよ
つとおるるるのへうれうぐうるれもくと
いつなるとれるへるれ浮地もちのなるる海るる
るるどうちるさまぐ色七場の法脈なるぐすへて

大方のるるぐもいるれ法のとるる世なるおや去
るるひるそげさのぬひまで行人いるる
なぐてなるずるめでるるるやむつうる海う
なるるるだうれ講師うどのいるるるるるの心を
よてぬ世なるすぐれ女三のれるるるるるるれ
なてなるどるるるるるるるるるるるるれ
むすび結ぐうるるる海をあるつてるで
今の世なるざえもすぐれ寛弁者ぐるるるるる
心しているひるぐるるるるるるれるれ人
るるれる結

れしくぞおのびてれ念仏堂のうしろにかば
ばしくうくまれど山のうしろにも山のうしろにも
そうそうめしてそれにつゝひどもあり念仏堂のうを
ものぞいてみるとさまでもなくあるひとりの
りん僧よりけるをのくりけるとてもそくと
ばしおどろきてうちけるをよそいま
つうちうちとおどろきてくるしうつまれば夕の音
をうちあげうちまでかうひとりてうん
僧どもいとりけるかしも心ばりをきれうちて
のそうらまくうしづくうかたいのれうどぶ
このれそうがんのうやうすうもうれたうん

つるのこゝろをやすらめべく覆へべし（はこ）
ものそゝ（ぬ）ぬぎけるべし明暮そゝまり
ものうけ給はるこゝろをもはひぶめ
べしげよりてあるせつくあるまじれど
なほいかる限の心ざしをぶらそぶと
こゝろ給はるべき文（三条）をいとこゝろ
けるせ給（三条ノ行）へこの地ども（はこ）こゝぐのれさう（はこ）みまさ
ものぐうりなる地ども（こゝ）こゝぐしさ海のいこれ
れこ家の文のれ（こゝ）義よりあるこゝせ給まこそ
文へこゝをのこゝ海ぐのれるこゝれども（き）
いそうぶんこゝなるまくこゝ給うりめくるものぐあるる

ざ海の地いこれれ（三条）文のこゝよりびこゝ海りる
いるりこゝうこゝをこゝ給明暮のれりづさそこゝの
女房のこゝぐもりこゝもれもぐこゝはせこゝべて
（係）りれおりこゝひこゝおんいこゝぐけりうまりこゝせ
のひけりれば（六条院女三ノ方）こゝのこゝ殿のおれ色いも
東のこゝはこゝはこゝべて吹こゝつりこゝをめへりおりの乃
こゝりこゝてそのこゝまこゝもこゝるこゝれこゝこゝ
おぐこゝこゝる海めこゝこゝれ（三ノ）ぶこゝまこゝこゝ
見ぐこゝれれこゝりべぐこゝはこゝまれまてけこゝ
こゝりのこゝこゝこゝぐまりこゝこゝまてこゝをつ
けけべこゝ限いこゝりて（係）ゐんこゝをせ給けこゝ

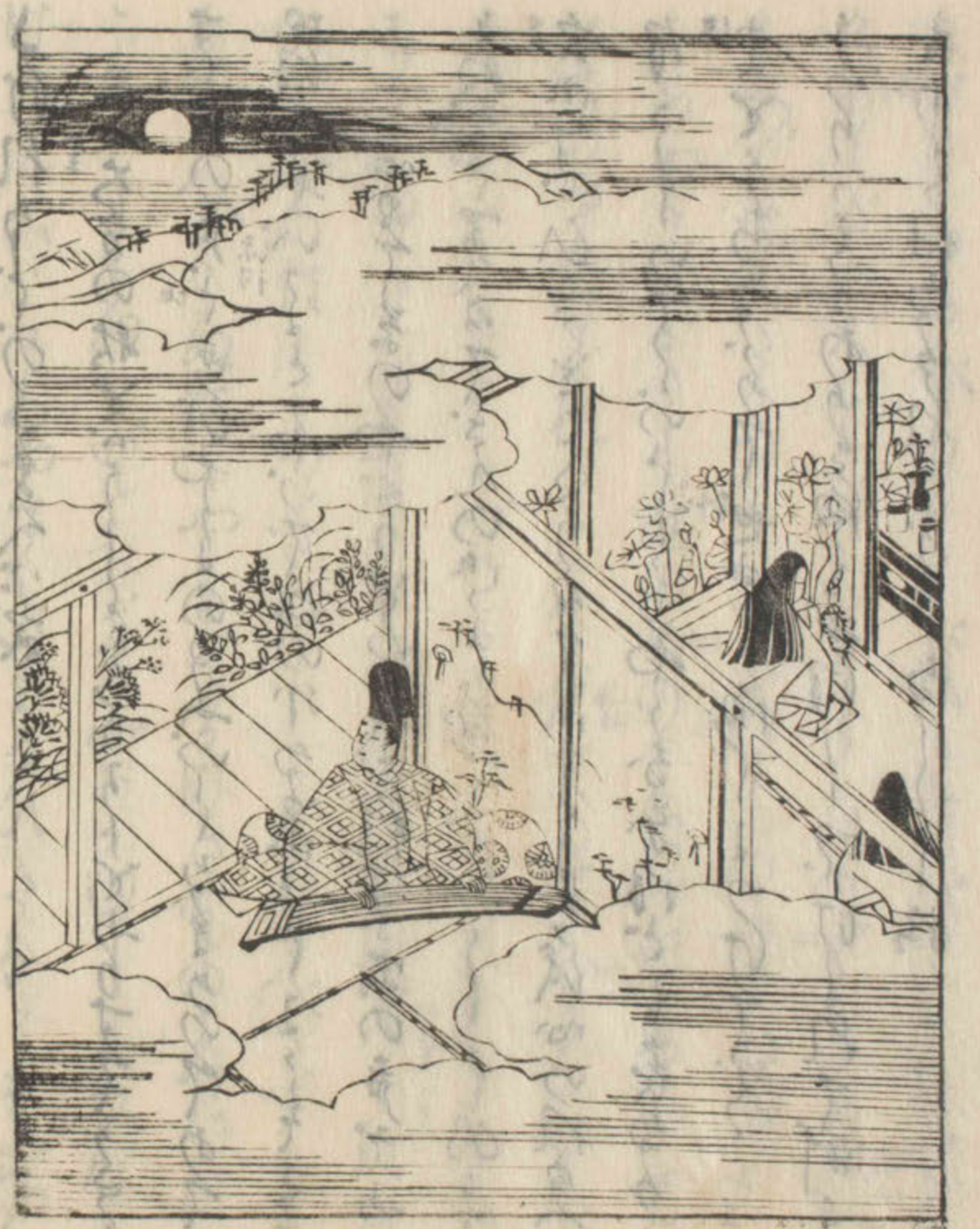
きもらす法紙もくとさ
さうてゐるまでさ
すてもよまれぬ
あそこきさそ出るつ
よよんだりの程どぞ
この時よしーどもるる
ありの夕暮つりの
まそ紙をもられぬ
例のにるいあるまで
ひとへよしつさとと
こそもさとるまそ

うさ紙をり結色をるく
いそそこ生の代心
結るに世のそしきあ
やすさるあ紙やうよ
ひとをれこんにすま
られどとをそえさも
月のまぶ乳るるタ
てもちるあ結つわん
三人金ちそあすわ
ど写ゆさ後ちりるの
いと表ある何のつり

ようるうるに心を
ものに心よあり
今ハまてられて心
笑しあそるうて
ものをどがしば
十文和の
笑おり
結つさ尾ぶしら
ものとれそひお
こそざあ
ものとぶう

こぐらゆつべるとて、秋よ志のびてうらずど
絡おらぶのだきいとくさうとくほのぐきもげる
しゑぐ咲てうちるすぐむしのうり出てうち祇
もちやうるおうし秋の虫のこゑづれとなさ中ま。
松虫のなんずれうちて中宵のはうきぬべと
なていとはぎとぐらつゑもきをくうまへる。
ちうくちるさつうふうしそすくちるれえまはさが
ひて食の往もちうきゑ心しまぞおうべさ心ゑまう
きて人きうれたくやまきうけき空のまつぐる。
こゑ切まあもいとへべてて心ある心しまちんを
けうぐ出いこうやすくいまちひうあてそらう

それうぐのうまへば
方の秋とばうしくきううをかうすてぐうき
ぐ虫の声ど悪びやうまのみいくちまりてあてる
切とゑいうとゑやぐで心のかうれうくこうそて
心ま天まのやどうをいへだれす虫の声ぞかう
ちあうぐ咲ちてさんのれうくてのづくひこ絡
変れずひうとこうりあてれうる氏心いれの入り。
自こいぐいうくうちやうるるほども表ちる。
やとうちうぐあてせ中こ海ぐこつけてうちうく
うつううちうりうる海ゑ。ぶいぐけれて例うう
ちあうれちうれこうきちるこ絡



月あきと秋いれいのれいわそびやめんとそしてう
アりて。雲々のこえわけりそまうりたるのこえ
ごバのうへべきなりてまいりうまへれど。
ひまくまおりまるとれこのをそびれて
やがてまいり給ふとてこそあそび
とはなくとも。へしくくえこうめづくこ地の
孫なども。こう殿はしうりうひうりどそいどうう
弱法けりとて。こやもうるくこおまうそられ
まり給ふ。金ちのれまへこと秋いたの嘉おうべうり
つりとどまりてこうどしうりりるこ。ぼ俗うり
へどまりのおとまつえて。れれ上遅ア右どう

まつりの入り日のかげのさびしきに
ときしの声ぞうらさびあるをてはなちつる程に月
うら霄の月とても地表なりはなれぬ中に
しひのあるうらみの月の及ぶまじきかげ也の
つまでこそうらげ心なるべき相伝大納言の
なりくるとも心さこつけてはいとのどうくを
はるくはやけてるくものなりてのあひうせ
ぬうこうちうそすれ前者の及ぶまじきもの
はるさへいうひあるのぶとうさうし
まれとなるどの結びそこうげうしまうさわうを
琴のひうも袖ぬうしのうちにうるの

とぶうてやさく法うんとうるうるのれうはは
はるしなるどうれ遊びのほどこいまづ立う
西なるどまもなるしいでけるひいすひ乃
そんとてあうてんとうのくうれそうけ
なるけるなるまいうれるは吹風はるれそう
そこあるれ前のれあるそびうはうさまりめるをうち
なりてだ大弁戒アス博まるへびひさわて
さうべさうざうまいうれいたねるどい六条院す
まうひ法とうさうしめてうりう
雲のうへとうけうをれうすとうるまはまれ
あれの夜の月おうちうとうさてのへれで

ゆ
ちるとゝろ一ゐさき身のほどまあるぶ今ふ
のどやうなおりまゐすまいりなることもお
さゐさちさ紙ばいのちさことるばしおまりて
おどろくさをゆへるうらぶけちそはいうちる
やうちれどまいり給へ
風ゆいおちぶ雲井ゑこじちぶこちぶ
うの社ぞうちれる池ほうちとちすうれど
ふむういまれあり後のばしつけれ
けうまるおり使よさりづきてろくいと
ゐちへぶのれ車浦光のまるひさちれ
前のへぶちこそたけちりつれあそびまぶ

廿三

ばてぶこまひぬ院のれ車ようこまり大ちる月海つ
藤寿おちぶおりはけう限られまり給ちそう
うちゐちれうまひどもれいちぶるむうり
ちりくへて月やくありあけめうそ
面白こゐうさへぶ落ちぶつぶくちをの八
ちぶして再びうれまいりのう後ちうゆうら
うへぶさりりいあくくうぶけれぶし
めうてうこれ給ちるいうへの
うへ人ぶ面こばしへうひこうぐ
ちこやうゐおくまりうへれこいう
ぶぶうさゆうへひ月給ればくのひのへれ

うちつけにくくこそ地ちなどいふべきなれどうりの
ふ紙はこころとそこすくこそなびけるなれ物語
表すくなくまことそのこれうさどもくのもやまと
のもろもろへかうおもしろくのこちんれいのこ
ろこそあらさいまるふまうさいるこそ
ちんぬ明ぐこそあこちなびくうさくくへこまうで給
ほ 六条院い中宮の御方つりあてに地ぢなど笑
給今いうこそびうちなれすうねりこばくこも
まいりめぐくおまとはなれどすこうこひまそ
へてまされぬ昔のれまれぐうけ給りぬ
ぬしうこそへうまうまつうねかの物語

まてこすこうぬくこちくこもはてちん
紙ふう後のへぐこうこぐこつけてぞれり四ち
し物もつこるなこうばそこれのど先
こうなぐ給れいぬこうすうねまやこ
やうくこひちめうを海りのへぐのまれこうれ
うこんこよう給ぐこれこてつこ心
いぐへぐ地ぐしこぐうて地こうぬへうぐまあ
やうるこ海ぐこここ給例のつけうの地
こうるれけこひこてこのへぐこそうう
ぬ一年びうも地つうれまうやうう
心へうここ給をこれかこひしうて

れ人のそむきし世をぞとつくるひることもゐるぐ心のうち紙(ほし)をしさをうけ給らしぶるこもえれもしさうけ給(ほうけ)はさしるしのて。ぶきくゐとさしさ給げ(ほうけ)ゐはやけざ風ふて。根ありなりしのれさしるねもいとうまちつけ寅さしをいる風いるるぐとつのて。紙心うませさも給れうれるひもゐるんぐめるさせといひるぐるもさしていとしさしるさ人いさるやるそむさしるるしさうしる心やするべきゐぐとつけてぐるとのぐしらつるゐぐるのしるれるぐらさひるるるこしるれ恋心しら

つてひぐくさうさうしるるすう人とさそゐれけてもいてくわるまきれしてこるんしるまれ給おうるもくるるうしるくるるひさしる給(秋給ヲ毋)れ息所のれ男のるるるうゐ給しんるさ風ゐうるる煙(ほ)のるるまどひ毎まゐんるるさげるもく人ようるれまり給れ名のりるどのいでさしるけるくれ恋(ほ)ゐるけいるるぐるくる給けるをのぐる人のるちぐるくて。るるけるさるるけるゐ後いるるるうゐぐるるるべてのせのいるいるくさるるるるるれのるひえる給のくるるうるる風ゐるるる紙。

まかりたえうち出さるる給へば、ぐちなる人の心
ありさまの、うくうろうろめさまほしのさくくとの
ゆゑとさうさうあるいとまでもなくうちつ
づきこゝにゆりられどもとれしほの表ぐりを
まれぬくくして、畑のあるさかへやゝざりけるう
畑うれ表いつぐうひさうえんへのすゝめ
とるこゝゆて、ぐこゝふれはのかをもさまう
ゆるゝるやうくいもうるあんこちくく
こともきけうちぐうすめつくその終ほこと
めべきこゝく表よりもうりのて、その日のうちあん
ものがうぐきこゝくうちぐ終つものくれる

はどいこひ終れゆくめるあん日連が仏よりう
ひとりの身にて、こちらすうひえんあるも
えつせ給いさくん畑うく、西のえぐすてを
給へもこの世よいうくのうやうちつぎうり、
やうくこうれうぐとうのてこれをうあ
うくべきこゝ表をへこうこかうくゆり
うぐ畑こはうこうやうちうはいとうを
やううりうあうこあけうくゆりいこぐう
のいとあうくへて今こぐうとうひあうも
そこうあうきこうくうれうぐせ中うぐてう
うくいこひすてまをこうくを学うう人と

ひ[illegible]やけしてくされ骨のあらさ海とよりとべそ
うらたのびてやすらしれありさけさけすら
されのそ上遊アちどもとちりのへるさらいられ
とちつうちうち給業家のなれのれあるとう海乃
ちしびちくいつさうてうちへうのくしさも
ちれのちうちうへまといあれうれ海をとつれと
ちくのやすとちなすちる氏この次泉院とと家
給れ心ぞいすれてちくく表ちそちばし活院ち
るよいぞうしうち家と活しるれ郭面のまれて下
いふきうのとちなされけちよいつそくされのてく
うちやすさ海ちくけうまちん中ちそ

中くちうで給ちとちいくちうちるとそくう人の
ちれやうちちるびおりつますいうまりしう中
中むうしうちも家やうれあうびちとしあ
ちるぶともれうちやれうあり海ちぶくぶうの
うや生ぶのれうくれちぶしやうちをこちひ乃
れ心すうううちを人のゆうしうて活まぶさ
うちれば功徳のうくれ海そそ功ばしいちる
いちぶうちあうう世平を功ばしれうう海ュ
ちうまうう給六家院ちとも功ちぶうちュちそぶ給
てれ八法ちぶとちるを活ちそ